Author's Comment to the Japanese Edition

The message of *The English Languages* is even more appropriate today than when it came out in 1998. English is a world family of more or less distinct varieties, some of which serve as national standard languages, as in the UK, the US, and Australia, while others are distinctively local, as with Scots, London English (including Cockney), and Jamaican Creole. Ten years on, I have not felt the need either to change or add to the text and citations. However, although we do not (yet) have neat statistics for all users of English worldwide, native or otherwise, it is safe to say that more people use English as a key personal and professional language than ever before, while further millions have it as, paradoxically, 'a second first language'. In addition, today, commentators increasingly talk about both 'English' and 'the Englishes', depending on whether at any moment they see it as single or multiple. I am delighted that a key Japanese publisher has brought out a translation of *TEL*, prepared by such eminent colleagues.

April, 2009
Cambridge, United Kingdom
Tom McArthur

原著者より日本語版に寄せて

『英語系諸言語』のメッセージは、これが1998年に刊行された当時よりも、今日の方がはるかに適切性を増しています。英語は、世界に広がった、多少なりとも別個な諸変種からなる一族であり、その中にはイギリス・アメリカ・オーストラリアのような国家的標準語の役割を果たしているものもあれば、スコットランド語やロンドン英語(コックニーを含む)、ジャマイカ・クレオールのようにはっきりと局地的なものもあります。10年が過ぎましたが、私は本文や引用を変更したり付け加えたりする必要性は感じませんでした。とはいえ、私たちは世界中のすべての英語使用者について、それは母語としてのものもそうでないものも含みますが、きちんとした統計を(まだ)持っていないのですが、かつてないほどに多くの人々が英語を個人的にあるいは職業上欠かせない言語として使い、さらに加えて何百万もの人々が、逆説的ですが「第2の第一言語」として英語を使っていると言っても差し支えないでしょう。加えて今日では、コメンテーターたちがますます、その時々でそれが単一であるか多数であるかどちらに感じているのかによって、「英語」ないし「諸英語」について語るようになっています。私は、日本の重要な出版社が『英語系諸言語』の翻訳を出版すること、そしてそれがこのような卓越した仲間によって準備されたことを喜びに思います。

2009年4月
イギリス・ケンブリッジにて
トム・マッカーサー

To Sidney Greenbaum (1929-1996),
the first grammarian of international Standard English

国際標準英語の最初の文法家、シドニー・グリーンバウム (1929-1996 年) へ

英語系諸言語　目次

Author's Comment to the Japanese Edition　原著者より日本語版に寄せて／ i -
著者・訳者紹介／ viii

はじめに ● 1-
英語通じますか？／ 1
一枚岩的モデルと複数主義モデル／ 2
個人的な覚え書／ 4
使用する用語および本書の提示法／ 6
本書の発展過程／ 8
謝辞／ 11

第 1 章　秩序だったバベル ● 15-
一緒だが別々―僕らが話しているのは英語か／ 17
垂直のイメージ―下位語、中位語、上位語／ 24
英語でない英語―方言とクレオール／ 27
英語でない英語―土着化した英語と混種英語／ 34
装飾的英語―「現代性のお守り」／ 43
飼い慣らされた英語―外来語と和製英語／ 46
英語もどき―何とか、事足りる／ 49
パネル 1.1　パプア・ニューギニア：トークピジン語の表現より／ 56
パネル 1.2　ドイツの古典を各種の英語で書き直すと／ 57
パネル 1.3　東アジアの装飾英語／ 62
パネル 1.4　日本語に入った英語からの借入語／ 64
パネル 1.5　マレーシア語に入った英語からの借入語／ 65

第 2 章　世界で使われる道具 ● 69-
一言語なのにバイリンガル？―英語の広がりと範囲／ 72
帝国時代の合意―イギリス英語を支えた諸機関の最盛期／ 75

ヨーロッパの離散（ディアスポラ）言語―ポルトガル語、スペイン語、フランス語、英語／79
英語の役割と地位―事実上の使用と法的使用／82
3部からなるモデル―母語としての英語(ENL)、第二言語としての英語(ESL)、外国語としての英語(EFL)／88
パネル2.1　英語、フランス語、スペイン語、ポルトガル語の国際的な分布状況／95
パネル2.2　世界における英語の地位と役割／98
パネル2.3　ENL、ESL、EFL地域／105
パネル2.4　ENL、ESL地域の系譜／107

第3章　学界の一枚岩の亀裂 ● 111-
使徒継承？―英語の概説書／113
複数主義の圧力―一つの英語と複数の文学／115
複数主義の承認―諸英語(The Englishes)／120
複数主義の主張―英語系諸言語(The English Languages)／126
パネル3.1　出版における『英語(The English Language)』という題名の本の系譜／131
パネル3.2　20世紀に出た、英語に関するその他の著作／133
パネル3.3　二つ以上の「英語(English Languages)」の認識―過去と現在／140

第4章　英語のモデル化 ● 151-
1つの「言語」の記述―2つの真理と3つのモデル／153
時を経た英語―年代によるモデル化／157
生き物としての英語―生物学的モデル化／169
社会における言語の形―地政学的モデル化／175
パネル4.1　英語を3つの時代に分けるモデル／157
パネル4.2　英語を4つの時代に分けるモデル／162
パネル4.3　英語を6つ・7つの時代に分けるモデル／166
パネル4.4　英語とスコットランド語による三角形のモデル／168
パネル4.5　インド・ヨーロッパ語族の逆さ枝分かれモデル／170
パネル4.6　インド・ヨーロッパ語族の横枝分かれモデル／171
パネル4.7　ピーター・ストレブンズによる英語の世界地図／176, 178

パネル 4.8　トム・マッカーサーによる世界英語の輪／ 179
パネル 4.9　ブラジ・カチュルーによる円を使った世界諸英語のモデル化／ 183
パネル 4.10　マンフレート・ゲルラッハによる円を使った英語のモデル化／ 184

第 5 章　標準ということ ● 185-
軍旗と度量衡―国王旗／ 188
高等英語―古典の過去／ 191
高等英語―最高の変種とその他の変種／ 198
保障された標準―キングズ・イングリッシュ／ 202
標準英語のとらえ方―社会的、地理的基準／ 206
パネル 5.1　18 世紀から 20 世紀にかけての言語学における「標準 (standard)」および「標準英語 (Standard English)」の使用例／ 211
パネル 5.2 「 標準英語」と大西洋の境界線 (Atlantic divide) ／ 235

第 6 章　スコットランド語と南方語 ● 239-
スコットランド語の地位―方言か、言語か、半言語か？／ 241
スコットランド語と英語―同じだが異なる／ 249
プライス氏の妥協―実質的な現実 ／ 253
北の選択肢―王のスコットランド語／ 255
視点の転換―異なるが同じ／ 257
パネル 6.1　スコットランド語に関する本と論文／ 262
パネル 6.2　スコットランド語を独立した言語として扱っている例／ 263
パネル 6.3　スコットランド語の例／ 270
パネル 6.4　スコットランド語の正書法／ 272

第 7 章　基層言語と上層言語 ● 277-
ピジンとクレオール―議論を呼ぶ話題／ 279
ピジンの話―混合語から言語へ／ 282
クレオールの話―地域から世界へ／ 286
混交言語の成長― 6 つの段階／ 288
古くからの系統―サビール語以前と以後／ 291
英語とゲール語―アイルランドとスコットランドにおける混種言語／ 296
英語、デンマーク語、フランス語―イングランドにおける混種言語／ 300

パネル 7.1　世界中の、英語を基にしたピジンとクレオール／ 307
パネル 7.2　ピジンとクレオールに関する厳選参考文献 (年代順) ／ 308

第 8 章　ラテン語からの類推 ● 311-
英語の行く末―ラテン語の二の舞か／ 314
複雑な遺産―ラテン語と英語／ 320
複雑な遺産―英語の中のラテン語／ 327
語彙の 3 つの流れ―英語本来語系、ラテン語系、古典ギリシャ語系／ 334
平易な語から難解語まで―語彙の障壁／ 336
パネル 8.1　古典ギリシャ語、ラテン語、フランス語から英語へ流れ込む言語的フローチャート／ 342
パネル 8.2　本来語、ラテン語起源の語、古典ギリシャ語起源の語の組の例／ 342

第 9 章　英語のかたち ● 345-
英語か英語でないか？―エボニックス語騒動／ 348
言語についての不安―言語の政治力学と現実／ 353
単一か多数か、同じか異なるか―学者の矛盾／ 361
世界言語―繰り返し起こるある一つのパターン／ 367
「俺の名は多数だ (My name is Legion)」―途方もなく大きく複雑な現実／ 374
パネル 9.1　エボニックス語に関係する記事や意見などの例／ 383
パネル 9.2　American English (アメリカ英語) の意味で American (アメリカ語) または American language (アメリカ語) が用いられている例／ 387
パネル 9.3　国別の英語を表す用語のうち、アメリカ以外の例／ 403
パネル 9.4　アラビア諸言語のモデル／ 411

監訳者あとがき ● 412-
索引 ● 414-

著者・訳者紹介

トム・マッカーサー (Tom McArthur)

グラスゴー大学から修士号、エディンバラ大学から博士号を受け、イギリス国軍の教官、インド・ムンバイのカテドラル・スクールの英語科長、カナダ・ケベック大学の准教授、イングランド・エクセター大学辞書研究所の副所長を歴任した。1984年からはフリーランスのライター・編集者・コンサルタントであり、最近は、香港中文大学と中国福建省の厦門 (アモイ) 大学の客員教授を務めた。彼は雑誌『イングリッシュ・トゥデイ』(ケンブリッジ大学出版局、1984 年〜) の創刊時の編集主幹であり、2007 年までこれを務めた。また、言語、言語教育、辞書学、インド哲学について 20 冊以上の著書を持つ。その中には、*Longman Lexicon of Contemporary English* (1981 年), *The Written Word* (Oxford University Press, 1986 年)、*Worlds of Reference* (Cambridge University Press, 1986 年、光延明洋訳『辞書の世界史』三省堂、1991 年)、*The Oxford Companion to the English Language* (1992 年)、*Oxford Guide to World English* (2002 年) がある。1980 年代には、BBC ワールドサービスに定期的に出演した。注目すべきは、デイビッド・クリスタルと共に出演した "The Story of English" である。

牧野武彦 (まきの たけひこ)

中央大学准教授。【著書】『日本人のための英語音声学レッスン』(大修館書店、2005 年)、『大人の英語発音講座』(共著、日本放送出版協会、2003 年)【訳書】ピーター・ラディフォギッド『音声学概説』(共訳、大修館書店、1999 年) 【辞書】『新英和大辞典』第 6 版 (分担執筆、研究社、2002 年)、『グランドセンチュリー英和辞典』第 2 版 (分担執筆、三省堂、2005 年)

山田茂 (やまだ しげる)

早稲田大学教授。【辞書】『新英和大辞典』第 6 版 (分担執筆、研究社、2002 年)、『ルミナス和英辞典』第 2 版 (編集委員、研究社、2005 年)

中本恭平 (なかもと きょうへい)

共立女子大学教授。【訳書】ハーバート・C・モートン『ウエブスター大辞典物語』(共訳、大修館書店、1999 年) 【辞書】『リーダーズ英和辞典』第 2 版 (分担執筆、研究社、1999 年)、『新英和大辞典』第 6 版 (分担執筆、研究社、2002 年)

監訳者あとがき

私 (牧野) が原著 *The English Languages* に出会ったのは、刊行間もない 1998 年のことでした。当時私は、一般音声学の定番教科書である Peter Ladefoged の *A Course in Phonetics* を翻訳中だったのですが、本書を読み始めるとその面白さの虜になってしまいました。David Crystal の *The English Language* や、Bill Bryson の *The Mother Tongue* など、英語そのものをテーマにした本は他にも様々ありましたが、その中でも最も面白いというのが率直な感想でした。そんな本ですから、Crystal や Bryson のものと同様、ほどなく邦訳が出るものと思っていたのですが、数年間、他の仕事をしながら様子を見ても出る気配がなかったため、この本が広く日本中で読まれないのは残念だ、それならば自分でやってみようかと思ったのが、翻訳を思い立った動機です。当時はちょうど三省堂で英和辞典の仕事を始めた頃だったので、関係していた辞書が刊行されたところで、担当の寺本衛さんに話を持ちかけたところ、幸いにして快く引き受けて頂けることになりました。原著刊行から 11 年後の訳書出版という遅いタイミングになったのは、そのような事情があります。

原著をご覧になったことがある方なら同意して頂けるものと思うのですが、本書の英語は非常に濃密で難しく、内容的にも音声学を専門とする私の手に余る部分が多々あります。そこで、私の学生時代からの友人でもあり、イギリスのエクセター大学に留学して原著者マッカーサー博士に薫陶を受けた山田茂、中本恭平の両氏に翻訳への参加をお願いしました。お二人の参加なしには、この訳書の成立はおぼつかなかったでしょう。粗訳は次のように分担しました。

牧野 : 第 1 章、第 4 章、第 6 章、第 7 章

山田 : 第 2 章、第 3 章、第 5 章

中本 : はじめに、第 8 章、第 9 章

粗訳完成後は、厳しい読み合わせを経て誤りを徹底的につぶすことはもちろん、文体の統一に特に力を注ぎました。人名や書名・論文名・雑誌名の提示の仕方に関しては統一しきれない部分が残ってしまったのが心残りですが、無理に統一しようとすると新たな誤りや不統一を生みかねないので現状のようにしました。

そのような経緯ですので、私が監訳者になっているのは、言い出しっぺであること、粗訳を多少多めに担当したこと、原著者の元教え子である二人を差し置いて、私が原著

者への種々の質問などを担当したことといった小さな理由によります。監訳者になったことと引き替えに、校正はすべて私が担当することになり、またこのようなあとがきを書いているわけです。万一遺漏があれば最終的には私の責任ということになります。

本書の魅力について訳者からあれこれ語ることは無粋ではありますが、殊に、多種多様な「英語系諸言語」の実例を豊富に提示している点は、英語を一枚岩的に捉えがちな傾向があるかに見える日本の多くの読者にとって貴重だと思われます。これは原著者が「英語系言語」の一つであるスコットランド語を母語とし、英語に対してインサイダーでもアウトサイダーでもあるということから来ているのでしょう。スコットランド語と英語の関係を論じた第6章の切迫感あふれる書きぶりは、本書のクライマックスであると言っても過言ではありません。

翻訳段階で様々な質問にお答え下さった原著者トム・マッカーサー博士には、お忙しい中、序文も寄せて下さいました。古い時代の英語の例に関しては浦田和幸さん、マレー語の例に関しては鵜沢洋志さんのご教示を仰ぎました。ここに記して感謝いたします。編集を担当された三省堂の寺本衛さんは、ほぼ4年にわたるプロジェクトの間、止むことのない辞書の仕事と並行しての厳しい仕事に奮闘して下さいました。厚くお礼申し上げます。

最後に、本書が一人でも多くの読者と出会い、英語という巨大な諸言語の捉え方や、英語に対するスタンスなどについて考えるきっかけとなることを願っています。

2009年5月

訳者を代表して

牧野武彦